

パヴィアにて

江川 純一

あるいは日本においてパヴィア (Pavia) という名はあまり知られていないかもしれない。が、イタリアの他所でその名を告げると、一様に「bella città!」という反応が返ってくる。たしかに赤茶色もしくは黄土色に統一された中世の建築物が、名物である霧に溶け込む様は「美しい」という形容詞を用いるに値するであろう。かつて「cento torri (百の塔)」と呼ばれた町。現在でも数本を目にすることができる。市内のどこにいても、塔の位置とドゥオーモ (Duomo, 司教座が置かれている教会) のクーポラを確認すれば迷うことはない。「英米軍に爆撃されなければ、もっと美しかったのだが。ポンテ・ヴェッキオ (コペルト橋) も壊されてしまったよ。今のものはひどいイミテーションだ」。同じアパートに住むヴィッティ老人は微笑みながら語ってくれた。町の北側にはヴィスコンティ城が立ち、南のティチーノ川に向け城壁跡が点在する。近郊には外陣の青が印象的なカルトゥジオ会のパヴィア修道院。ヴィスコンティ家の霊廟として作られた。大学も一家によって14世紀に創設されたものであり、未だヴィスコンティ家の威光が町に注がれているかのようだ。

しかし、それらはいくまでも遠景である。ピントをより近くに合わせてみると、10代の若者による落書きが猛威を振るっていることが分かる。12世紀の建物であろうと大戦後のものでであろうと、教会であろうと住宅であろうと。多くは意味不明の記号やイメージだが、町で最も古いロンバルディア・ロマネスク様式のサン・ミケーレ教会のファサードには、「CREDI? (信じるのか?)」と書かれていた。彼らの服装を観察してみると面白い。時折、日本の国旗が入ったシャツのほか、例えば「矢東京」、「ラテチ」といった意味を成さない日本語を目にすることができる。煙草をねだってきた高校生に聞いてみると、漢字よりもカタカナの方が格好いいのだとか。彼らはテレビで毎日放映される日本のアニメをみて育ってきており、

アニメについては僕よりもずっと詳しい。日本のアニメやゲームを専門に扱うショップがこの小さいパヴィアに確認できただけでも五軒はある。アパートの大家さんも大の日本最ファンで、自身が営む雑貨店に着物や箸を飾っている。日本に対するイメージが良いのには驚くばかりだ。それとは関係がないと思うけれど、とにかくよく声をかけられる。町中では「肉屋さんを知らないか?」、スーパーマーケットではおばあちゃんが「棚の上の杏の瓶を取ってもらえる?」、電車に乗ると「この電車はチンクエッテッレに止まるかしら?」等々。自動販売機はたいてい壊れており、煙草一つ買うにしても人とのコミュニケーションが必要だ。ある時、駅の販売機で切符を買おうと、おつりが足りない。窓口に文句を言いに行くと駅員さんはこう切り返してきた。「機械で買うからいけないのよ」。

1989年3月にドゥオーモの塔が老朽のため崩れ落ち、市民4人が犠牲になった。その慰霊碑は現在、祈りの対象となっている。ドゥオーモ広場にいた人々に伺ってみると、「イタリアの建物は古いからなあ、自動車の振動で壊れてしまう」、「たしかに悲しい話だが、他の場所でもありうるぞ」という返事だったが、中には「彼らは教会に来て亡くなった。神に呼ばれたのだ」という意見もあった。今後、犠牲者がどのように扱われ語り継がれていくのか注目している。

さて、宗教学研究のイラリアさんの尽力とアンニバーレ・ザンバルビエーリ教授のご厚意もあって、昨年秋より同地の大学に登録している。所属先は経済史家「カルロ・M・チボッラ」の名がつけられた文学部歴史地理学科。自宅から徒歩5分。指導教官のザンバルビエーリ教授は、かつて東大宗教学でも教えられた経験をお持ちで、「キリスト教史 (Storia del Cristianesimo)」の担当である。奥様は日本の方で、言葉も満足に出来ない僕は何度お世話になったか分からない。教授はいつも疲れている。彼は学科長でもあるため、大

学では雑事に追われる。オフィスアワーには研究室の前に学生が列を作り、それほど重要とも思えない質問をして帰っていく。研究室の移動工事の際など、秘書や大学職員ばかりか工事業者までが「Professore!, Professore!」と教授を頼っていた。「円滑なシステム」には程遠いが、大学の空気は明るい。学生たちは、(少なくとも学内では)真剣な表情をみせている。一般に男子学生はみな親切だ。教室の位置などを尋ねるとわざわざ連れて行ってくれる。一方、女子学生は多かれ少なかれ最初は警戒の色をみせる。しかし、同じ学生と分かったとたんに態度を変え、「生まれて初めて見る日本人!」と興味津々で、後は質問攻め。

ザンバルピエーリ教授は特に19世紀後半から20世紀前半にかけてのカトリックと自由主義、近代主義との関係を専門にされ、第二次大戦前後におけるヴァチカンの日本への布教にも関心を持たれている。イタリアにおける「宗教史学 (Storia delle religioni, Studi storico-religiosi)」の発生と展開を社会的文化的コンテクストから検討したいと考えている自分にとって、教授の助言は本当に参考になる。なぜなら20世紀の前半にリベラルな聖職者(例えば教授の研究の中心を成すE・ブオナイウティ)と初期の宗教史学者達(R・ペッタッツォーニやN・トゥルキ)はグループを組んでヴァチカンと戦っていたからである。

現在、イタリアにおいて「宗教学 (Scienze delle religioni)」, 「宗教史学」の講義はいくつかの大学に存在するが、教員は古代ギリシアもしくは古代ローマの宗教の専門家であることが多い。大まかに言って、「宗教史学」とはペッタッツォーニとその影響を受けた弟子達の一派を指し、「宗教学」となると諸外国で展開されたアプローチも含まれる。「キリスト教史」もしくは「教会史 (Storia della Chiesa)」に比べると圧倒的に少数派である。それでも独善的になりがちなキリスト教研究に異なる視点を与えるという意味で、「宗教学」, 「宗教史学」の存在価値はキリスト教研究者に認められているという。また、哲学科に「宗教哲学 (Filosofia della religione)」の講義が存在するが、当然扱われるのは西洋のみだ。現代イタリアの宗教運動などは社会学, イタリア以外の宗教はそれぞれの地域研究か人類学で研究されている。

講義に参加してみた。学生は40人程で、「16世

紀におけるキリスト教の拡大」についてであった。勿論、全部を理解できたわけではないが、内容はそれほど難解ではない。しかし、教授は板書をしていないし配布物もない。1時間45分の間、彼は一度もノートを見ずにひたすら喋りまくった。途中で「奇異に思われるかもしれないが、ここではこれをやらなければならない。申し訳ない」と僕に向けてエクスキューズを入れた後、教授はここまでのポイントについて纏め始めた。学生たちはその言葉を一字一句違わずにノートに記入していく。それらのポイントについて、二ヶ月に一度口述試験があり、それをパスしていかなければ単位が取れないのだという。僕も試験の日に他の学生とともに列に並び教授室を訪ねたが、(告白すると)雑談をただけで最終的に「trenta e lode (イタリアの大学の成績は30点満点で、最優秀の場合 lode (賛辞) が加えられる)」を頂いた。「non sufficiente (17点以下の落第点)」の学生もいただろうに、本当に申し訳ないと思う。

もう一方の講義は一転、僕を含め三人の学生で教授室で行われる。テーマは「カトリシズムの近代主義」で、教授が学生に質問をしながら話を進めていく。こちらは時代的に自分の研究に近いが、教授はさらにペッタッツォーニの話を付け足してくれる。一枚岩のように考えてしまっていたカトリックの改革運動が実は極めて多様であり、例えばロンバルディアとトスカーナでも異なることが分かる。それでも、カトリック思想の民衆レベルへの普及を意図していた点では共通している。そうした運動と連動しつつその外側からカトリックをも他宗教と同列に置こうとしたペッタッツォーニも同じく「自由の宗教」を民衆に普及させようとした。理論化の前にまず行動し、行動の中で思考していく。思想と実践の一体化、どうやらこの辺りにイタリアの特徴がありそうだ。

毎朝7時半、サン・テオドーロの鐘が朝を知らせる。その澄んだ音は耳に心地よいが、調律が狂っている鐘が二音あり、それが気になって仕方がない。カップッチーノとコルネットを口にしながら、何十年経ってもこの音を覚えているだろうな、と思う。

ここパヴィアに、来夏(2005年)まで滞在する予定である。